

2020年10月7日

東京都の区立小学校で校長を務めていた頃、月曜朝礼では、ほぼ月に一度読み聞かせをしていました。暗幕を引いた体育館の舞台のスクリーンに絵を写しながら、私が読み聞かせをします。一週間の始まりを、全校児童と教職員が同じ話を聞きながら、心穏やかに過ごす時間を持つてもらいたいと願いながら続けていました。

五日の月曜日にはお子さんたちに次のような話をしました。



(手話で、「皆さん」「おはよう」「ございます」
今日は、一冊の絵本を読みます。

(※本を読む)

みんなバスに乗れてよかったですね。絵本はお話を読みながら、ページをめくることに絵を楽しむこともできるので私は大好きです。この絵本の絵もとてもかわいくて気に入っています。動物たちの優しい笑顔が柔らかな線で描かれていて、一度見たら忘れられなくなりました。

実は、この絵を描いたエム ナマエさんは、目が不自由な男性です。大学生の時から絵描きさんの仕事をしていたのですが、病気のため三十八才の時に全く見えなくなりました。そして、この本の絵は、目が不自由になってから描いたものなのです。そのことを知ったときには、とてもびっくり

しました。全く見えないのに、こんなにすてきな絵が描けることにとても驚きました。

しばらくして私はナマエさんの、ある言葉に出会いました。そこには、目が見えなくなっても、絵を描こうと思った気持ちが書かれていました。目が不自由になり、今までのように絵が描けなくなつたナマエさんは、もう絵を描くことをあきらめよう、と思つたそうです。でも、軽い気持ちで、覚えていたことをたよりに絵を描いたら、その絵を見て喜んでくれる人がいたのです。ほかの人にも見せてみると、皆がほめてくれたのです。その時のことをナマエさんは、こう書いています。

「人が僕の絵を楽しんでいる。もう、それだけで十分だった。」そして、自分では見ることができなくても、また絵を描き始めました。展覧会も開きました。

もちろん、今までのように描けるわけではありません。形をとるときにボールペンを使って強く描くと、紙に跡がつくことに気がつきました。それを指でたどっていくことを続けると、描きたい形が描けるようになったそうです。

次は色です。いろいろな絵の具をためしてみましたが、でもなかなか思うようには描けません。あきらめず、やっとたどり着いたのが、パステルというものを使って描くことでした。パステルはクレヨンによく似ています。色の名前は大学生の時から絵を描いていたので、しっかりと覚えていました。お手伝いしてくれる方に色の名前を伝えると、百五十色のパステルから探して、ナマエさんに渡してくれるのです。それから、いろいろな絵

が描けるようになりました。

こうしてナマエさんは目が不自由になつても絵を描き続けました。そのきっかけは、ナマエさんの絵を喜んでくれた人がいたことです。そのことに気づいたからこそ、あきらめずに何度もやり直しながら、努力を重ねることができたのでしよう。そして、ナマエさんは再び絵描きさんに戻つたのです。

皆さんは気づいていますか。皆さんが成長し、賢くなり、優しい心に育っていることを喜んでくださっている方がたくさんいるのですよ。

(手話で)「お話を」「終わります。」



人の心は、心に響く言葉を「聴く」ことで支えられ、新たに歩み出す勇氣が生まれます。聖書の言葉を聴き、神さまへの祈りと賛美の言葉で、一日一日を丁寧に正しく歩む勇氣と、人を励ます喜びが生まれることを立教各校は伝え続けてきました。本校が言葉の学びを重視しているわけがここにあります。

(立教小学校校長 佐々木 正)

※「わんわんバス」

作きむら ゆういち 絵 エム ナマエ

新日本出版社刊